

肺腺癌IA期手術例に合併した腫瘤影の解析

著者	伊藤 博道, 石川 成美, 小貫 琢哉, 酒井 光昭, 山本 達生, 鬼塚 正孝, 榊原 謙, 南 優子, 飯島 達生, 野口 雅之
雑誌名	肺癌
巻	43
号	5
ページ	641
発行年	2003-10-20
権利	日本肺癌学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00134975

P-628 肺腺癌 IA 期手術例に合併した腫瘍影の解析

伊藤 博道¹・石川 成美²・小貫 琢哉¹・酒井 光昭¹・山本 達生¹
鬼塚 正孝²・憐原 謙²・南 優子²・飯島 達生¹・野口 雅之¹

¹筑波大学 附属病院 呼吸器外科；²筑波大学 臨床医学系 外科；³筑波大学 大学院 医学研究科；⁴筑波大学 基礎医学系 病理

【目的】胸部 CT が胸部病変診断に頻用され、解像度向上と相まって、末梢型小型腺癌が多く診断されるようになった。一方で、主腫瘍影に随伴する小異常影の存在が、主病巣である小型腺癌治療方針に影響する事態が見られる様になった。95 年に集計した多発肺腫瘍病巣のうち扁平上皮癌が 3 分の 2 以上を占めていたのとは異なる様相を呈してきている。腺癌多発を認識した小型腺癌診断治療戦略を考慮する必要があると考え、小型腺癌に同時異時性に認められた腫瘍影の解析することを目的とした。【方法】当科における 1988 年以降の病理病期 IA 期腺癌の手術 115 例の、同時性・異時性に腫瘍影を認めた症例を対象とし、明らかな肺内転移は除外した。【成績】AAH 4 例、乳頭状腺腫 1 例を含めて多発例と考えられた症例全体で 12 例 (10.4%) であった。女性 8 例、男性 4 例と女性に多かった。病変数は 2 病変が 9 例、3 病変が 3 例で、同時性が 8 例、異時性 3 例、異時性・同時性両方が 1 例であった。切除肺内に偶然見つかった 1.5 mm の AAH の 1 例を除く 11 例は全て術前に CT で腫瘍性病変が指摘されていた。主病変は 12 例中 8 例が肺葉切除で切除され、副病巣のうち 4 病変は切除された標本内に含まれたが、残り 8 病変は他肺葉病変を縮小手術で切除した。異時発生第 2 病変には 4 例中 2 例で肺葉切除が行われた。【結論】病理病期 IA 期肺腺癌には約 10% の割合で同時異時性の多発癌との鑑別を要する腫瘍影が存在した。これらにはいわゆる前癌病変とも考えられる AAH も含まれたが、それらを含め主病変である腺癌の術式を積極的に縮小すべき対象と考える。多発腺癌であっても小型早期であれば、各病巣の縮小手術で長期予後が期待できるので、主病巣のみでなく全肺野の HRCT による検索が必要である。